

## 第5回リンダウ・ノーベル賞受賞者会議(経済学関連分野)

所属機関・部局・職名: 一橋大学大学院商学研究科博士後期課程3年

氏名: 高須悠介

1. ノーベル賞受賞者の講演を聴いて、どのような点が印象的だったか、どのような影響を受けたか、また自身の今後の研究活動にどのように生かしていきたいか。〔全体的な印象と併せて、特に印象に残ったノーベル賞受賞者の具体的な氏名(3名程度)を挙げ、記載してください。〕

ノーベル経済学賞受賞者の先生方は一言に経済学分野といっても、ミクロ経済学、マクロ経済学、ゲーム理論、計量経済学、ファイナンスといった様々なテーマを研究されており、各エリアの一線級の先生方の講演を一度に拝聴することができる点はリンダウ会議の一つの特徴であるように思います。

講演内容に関しても、ご自身で現在進められている研究プロジェクトに関しての報告や、どのように経済学が発展してきたかに関する報告、世界各地から集まっている若手研究者に対するメッセージなど多岐にわたっておりました。私の専門分野とは異なる分野の報告も多く、所々理解が難しいところもありましたが、どの先生も講演内容をできる限りわかりやすく、そして聴衆を引きつけるようにプレゼンテーションをされていた点が印象に残っております。

昨年度、ノーベル経済学賞を受賞された Hansen 教授は不確実性と資産価格の関係性に関する進行中の研究プロジェクトについて講演されました。金融危機が多発する昨今において、不確実性がどのように資産価格に対して影響を及ぼしうるのかを理解することは喫緊の課題であるともいえ、私の関心領域にも近く興味深い講演でした。

Maskin 教授は、グローバル化が発展途上国における経済格差を縮小させるとする比較優位理論がなぜ現実のデータで成立しないのかについて、代替的な理論を提示し、説明されておりました。提唱された理論はもちろんのこと、要点を簡潔かつ的確にオーディエンスに対して伝えるプレゼンテーションは受賞者の中でも際だっており、目指すべきプレゼンテーションの姿であると深く感銘を受けました。

Phelps 教授はご講演のなかで、イノベーターとしての必要要件について、“imagination” “creativity” “skepticism” “insightfulness” といった要素について言及されておりました。これらの要素はきわめて一般的な言葉ではあるものの、経済学分野のイノベーターであるノーベル経済学賞受賞者の言葉には重みがあり、非常に心に残っております。

2. ノーベル賞受賞者とのディスカッション、インフォーマルな交流(食事、休憩時間やボート・トリップ等での交流)の中で、どのような点が印象的だったか、どのような影響を受けたか、また自身の今後の研究活動にどのように生かしていきたいか。[全体的な印象と併せて、特に印象に残ったノーベル賞受賞者の具体的な氏名(3名程度)を挙げ、記載してください。]

リンダウ会議のスケジュールにはノーベル賞受賞者の先生方と交流する機会が朝から夜まで提供されており、常にコミュニケーションをとることができる環境は非常に刺激的なものでした。また受賞者の先生方はどの先生も気さくな方々で、非常に話しやすい印象を持ちました。特に Phelps 教授のディスカッションに参加した際には、ディスカッション中には質問の機会が得られなかったものの、ディスカッション終了直後にお話しする機会があり、午前のプレゼンテーションとは異なり、メンターのように、私の拙い英語に対しても真剣に耳を傾けていただけたことが印象に残っております

Merton 教授のディナーでは、10人ほどが一つのテーブルに座り、ビュッフェ形式で食事をとりながらざくばらんに話をさせて頂きました。プレゼンテーションにおいてシステミックリスクについて講演されていたこともあり、中央銀行からの参加者も多く、システミックリスクに関するトピックが会話の大部分を占めていたように感じます。私が財務会計の視点から、金融システムの研究をしていると話したとき、Merton 教授に「面白そうだね」と興味を示していただき、私の研究の方向性に自信をもてました。

ボート・トリップでは、McFadden 教授とお話しする機会がありました。他の若手研究者とリラックスしながら話していたときに、McFadden 教授が自ら声をかけてくださり、非常に驚いたことを覚えています。McFadden 教授はとても気さくな先生で、ボートから降りた後も会場まで受賞者の先生方には車が用意されていたにも関わらず、我々と一緒に会場まで歩いていったことが印象に残っております。お話をさせていただくなかで、研究のモチベーションは何かという話題になったときに、McFadden 教授は“curiosity”であるとおっしゃっておりました。好奇心が研究のモチベーションであるということは珍しいものではないと思いますが、受賞者の方々が口にされるとその言葉には非常に重みを感じられ、私自身も知的好奇心を満たすような研究を将来にわたって継続していきたいと強く思いました。

3. 諸外国の参加者とのディスカッション、インフォーマルな交流の中で、どのような点が印象的だったか、どのような影響を受けたか、また自身の今後の研究活動にどのように生かしていきたいか。

これまでも国際学会に参加したことはありますが、リンダウ会議ほど世界各地から同年代の研究者が一堂に会してコミュニケーションをとることができる機会は他にないと思います。

彼/彼女らと話をしている中、どの参加者も非常に社交的であり、そして自分に自信をもって様々な場面で積極的に発言をしている姿がもっとも印象的でした。そうした参加者と比較すると、私を含めて日本人参加者は特にフォーマルな場(パネルディスカッションなど)で自分から発信する機会が少なく、彼/彼女らを見習い、自分の意見・考えを積極的に示すべきであると感じました。

また大学に所属している若手研究者のみでなく、各国の中央銀行からも多くの参加者が来ていた

ことも印象に残っており、経済学がいかに実体社会に対して影響を及ぼしうるのかを感じました。

**4. 日本からの参加者とのディスカッション、インフォーマルな交流の中で、どのような点が印象的だったか、どのような影響を受けたか、また自身の今後の研究活動にどのように生かしていきたいか。**

日本から JSPS の支援を受けた参加者は学生のみでなく、既に大学にてポジションを得ている方もいらっしゃり、様々な立場の方々と研究や将来の不安などについてざっくばらんに話をすることができました。特に、通常の国際学会と異なり、同じ経済学とはいっても研究領域が異なる方々との交流ができたことが私にとって新鮮であり、強く刺激を受けました。今後も交流を続けながら、様々な情報交換や、研究に関する議論を通して、社会に貢献できるような研究をしていきたいと考えています。

**5. その他に、リンダウ会議への参加を通して得られた研究活動におけるメリット、具体的な研究交流の展望がもてた場合にはその予定等を記載すること。**

受賞者の先生方や国内外の若手研究者とのフォーマル、インフォーマルな交流のなかでもっとも感じたことは「自分の研究を専門領域の違う研究者に対して説明することの難しさ」です。同じ専門領域を研究する者同士であれば「なんとなく」で伝わる部分であっても、領域が異なる者同士の間ではたとえ経済学という大区分が同じでも、なぜその論点が面白く、研究すべきであるかを伝えることが難しく、特に制度環境が異なる国外の研究者と話す場合には殊更難しく感じました。ただし、この点は自身の研究成果を社会に還元する上で、欠かすことのできない能力であり、自身の改善すべき点であると考えております。

**6. リンダウ会議への参加を通して得られた以上の成果を今後どのように日本国内に還元できると思うか。**

自身の意見を積極的に発言するという点は、個々人の気持ちの持ち方次第であるため、すぐにでも実践可能と考えている。今は一大学院生という立場に過ぎませんが、研究会や学会などでの積極的な発言を継続していくこと、将来教育者としての立場になったときに学生の発言を促していくことは、日本の研究者が諸外国の研究者同様に主張するようになる環境を育てるための草の根活動になると考えています。

またこのような貴重な機会を提供してくれたリンダウ会議の存在自体を研究者仲間や後輩たちへと伝えていくことも重要であると考えています。リンダウ会議を周知し、一人でも多くの若手研究者がリンダウ会議に参加して刺激を受けることは、将来の日本社会へのアカデミアからの貢献を促すことになると思います。

## 7. 今後、リンダウ会議に参加を希望する者へのアドバイスやメッセージがあれば記載すること。

先述のように、リンダウ会議ほど様々な研究者（ノーベル受賞者や若手研究者）とフォーマル、インフォーマルに交流できる機会はないように思われます。経済学分野のリンダウ会議は2～3年周期で開催されており、参加するチャンスはそれほど多いとは言えませんが、だからこそ、タイミングが合うのであれば積極的に応募することを勧めます。